

博士の観た富士山

デトレフ・フリードリッヒ・シャウヴェッカー

自然の見方や描写の仕方は、時代によって異なるものである。

明治時代以降、富士山を日本の象徴として眺めながら、社会的にまた国際関係の上で変化の激しい今世紀に、ヨーロッパ人がつくり上げたこの山のイメージの多面性が、そのひとつの例になるだろう。そこで、今世紀の前半におよそ二十人

のドイツ人が書き残した旅行記の中の富士山の描写に限って、その点を垣間見ることにしよう。

バロック時代に主として地理学的に紹介され、ロマン主義時代になると絵画的な風景として西洋人の視野に入ってきた富士山は、一九〇〇年前後から第一次大戦にかけて詠嘆をこめた美文で描かれているのが目立つ。それは、西洋で「ジャ

ポニズム」と呼ばれた、ひとつの「日本かぶれ」が最盛期にあったことを物語っている。ヨーロッパ流の——画面全体を塗りつぶす——パノラマ絵画のような筆法ではなくして、富士山の輪郭を強調し、山肌を淡白な言葉で印象づける紀行文の描写は、それより更に数十年前にヨーロッパで流行し始めた「浮世絵」の影響によるものである。物體的な重さを感じさせないこの風景描写は、第一次大戦の大時代的な社会状況の中で重苦しくなった日常生活より逃避しようとして、旅行者が見たいと願った、「日本」という明るい「夢の世界」とも関連している。

さらに当時、貴族の旅行者が多かったこともあって、個々の言葉と描かれる対象の配置とから、封建時代のヒエラルキーが浮かび上がってくる。言わば、富士山の「八」に封建制度を当てはめたとされるのである。ことさらに美しくした表現には筆者たちの社会的理想がうかがえるが、日本国家の象徴となったものに理想を託したということは、彼らの日本観をも表わしているのである。

こうした保守的な日本受容に追従しない書き手もいたが、その中の一人はワイマール時代に入ると、上流階級の「ジャポニズム」によるイメージを諷刺的に批判しながら、山そのものの生き生きとした印象を強調した。

ナチ時代になると、国や軍事の「力」の象徴として、富士山を国民性と結びつける傾向が出てくる。「ジャポニズム」の表現に「戦」の色合いが濃くなったわけである。

以上略述した富士山描写の流れは、それぞれ次のような具体例に見られるだろう。すなわち、

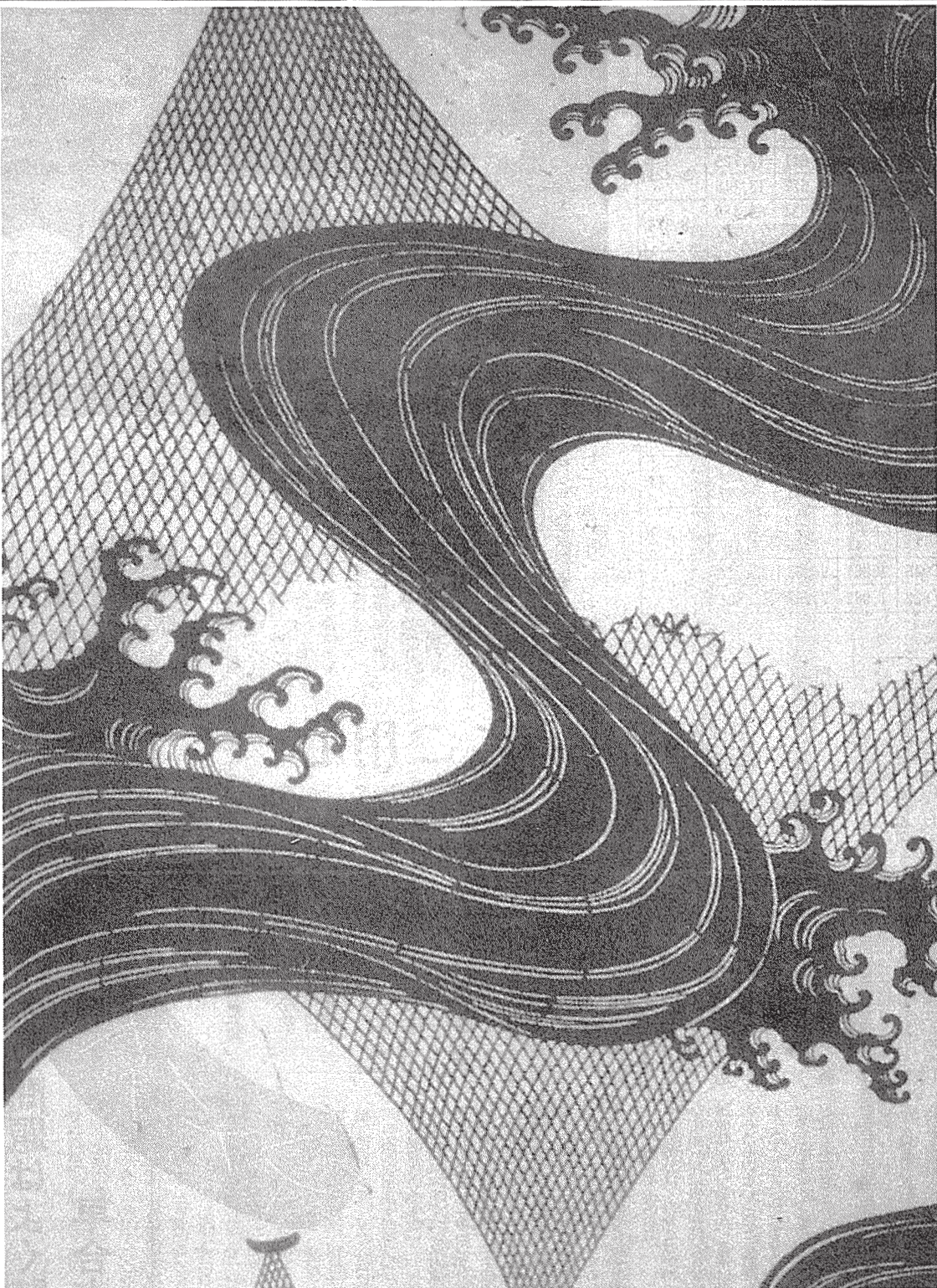
「霞の中から突然見えた富士山の、まったく汚れない美しい飛翔の線」(M・フォン・ブンゼン)

「バラ色の曙に、臣下の上に帝王が位するように、威厳を以て、万年雪の冠をかぶった頭が天空にそびえ立つ」(H・フォン・ケーニツヒスマルク伯爵)

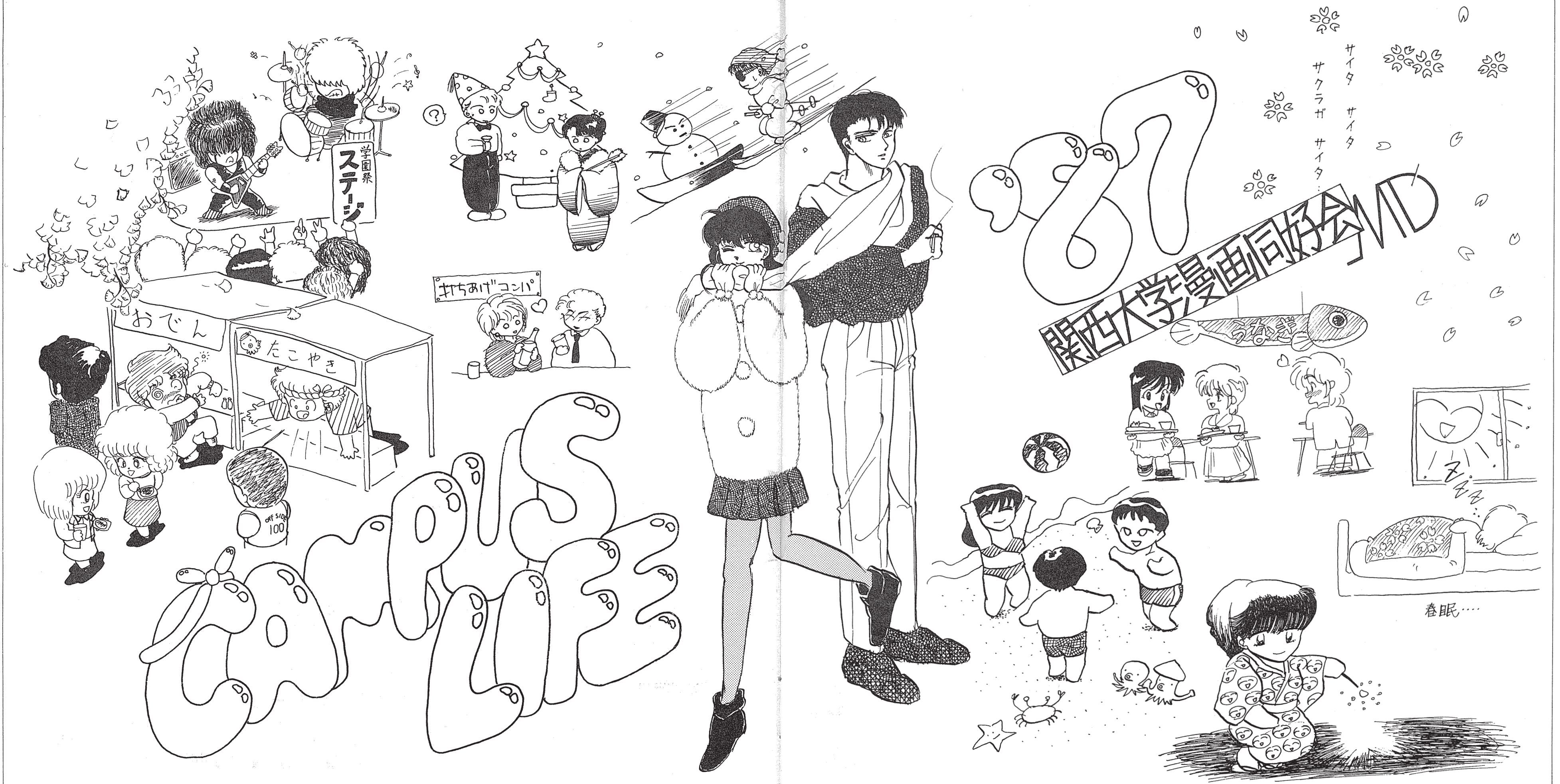
「巨岳の、ギザギザした青黒い頂」(F・クマー)

「黒い鎧にふりかかる白い雪」(F・ジープルク)

ジャポニズム——浮世絵からとられたモチーフ(デネケン、一八九六年)



二月と言えは大学入試のシーズン。今年には国立大学のA・Bコース分け、推薦入学制度などが話題となつてゐる。臨教審も秋の第三次最終答申を準備している様である。いずれにしても、受験生にとっては人生における方向を決める重要な時期である。▼ところでヨーロッパの大学入試に目を移して見よう。西ドイツでは、高校ギムナジウムの卒業試験(アビトゥーア)・フランスでは大学入学資格試験(バカロレア)に合格すれば、自分が大学を選んで入学することが出来る。この様な言い方をすると日本の受験生諸君は大変羨ましい思いをするであろう。しかし、独仏いずれの場合にも希望する大学専門分野に入学出来るかどうかは、試験の点数で決まるという点では我が国の入試と変わらない性格を持っている。▼しかし、日欧の大学入試に根本的な相違がある。我が国では一部の専門学校を除いては、高校卒業時点までは大学入試に照準を合わせた画一的な基礎教育を受けるのが実状である。ところが西ドイツでは、小学校四年生のときに大学進学コース(ギムナジウム)に進むか、その他のコースに進むかが決められる。したがってこの時点から、中・高校で学業を終える人達に対しては、社会へ出るための応用面を重視したカリキュラムが準備される。一方大学進学コースの人達に対しては基礎教育重視のカリキュラムが組まれることになる。西ドイツの人達は幼い頃から社会へ出た時の自分の役割を頭に置きながら学んでいることになる。▼つい先ほどのアメリカ教育省の日本教育の分析では、義務教育を高く評価する反面、ライシャワー元駐日大使の発言(大学の四年間は時間の浪費を引用し、学歴偏重社会の落とし穴としての大学教育の貧弱さと大学生の不勉強を指摘している)の機会に日本の教育と自身自身の勉学態度について、学生諸君ともども考えて見ようではないか。(T・F)



61 59
11 4 9

総合図書館・情報処理センター
創立一〇〇周年記念式典を挙げる。

総合図書館・情報処理センター
(昭和27年竣工のころ)

51
4

50
4

49
4

48
3

42 39
4 1

33 29 28 26 25
4 4 4 4 4

23 10
4 3

経済学部を経済学部と改称する。
新制関西大学に移行。法・経済・文・商の
四学部(各第1部・第2部)発足する。
新制大学院に移行する。
東西学術研究所を開設する。
第2部の全学を天六学舎へ移転する。
考古学資料室を開設する。
工学部 第1部を改称する。
経済・政治研究所を開設する。
工業技術研究所を開設する。
社会学部(第1部・第2部)を改称する。
社会学部(第1部・第2部)を改称する。
社会学部(第1部・第2部)を改称する。
電子計算機室を開設する。
(57・4情報処理センターに改組改称)
部設置研究室を開設する。
60・6情報処理センターに改組改称)
大学院を大学院設置基準による「博士課程
の大学院」に組織を改める。
飛鳥文化研究所・植田記念館を改称する。
一般教育研究センターを開設する。

開設時の天六学舎(昭和4年)

天六学舎の正門
(昭和10年・学舎拡張のころ)

4 3 2
9 4 4 3

15
10

14
8

13
2 8 4

11
6

大学令による関西大学として認可される。
法学部(法律・政治の二学科・商学部
(商業学科)の二学科)を改称する。
商学部を経済学部と改称する。
法学部を法文学部と改称し、文学科を
増設(昭和3年4月開設)する。
千里山に大運動場(現第一グラウンド)
竣工する。
クラブハウス(現以文館)竣工する。
第一回大学祭を挙げる。

【昭和】

千里山に大学本部を竣工する。29・撤去。
千里山図書館(現簡文館)竣工する。
千里山図書館(現簡文館)竣工する。
天六学舎竣工し、専門部を移転する。

開設時の千里山学舎
(大学予科校舎・大正11年～昭和9年)

千里山学舎の正門①
(大正12のころ・現15号門の位置)

11
4

【大正】

千里山に大学予科校舎竣工し、同年5月
大学科・大学予科を移転する。

開設時の福島学舎
(明治39年～昭和4年)

福島学舎の正門
(図書館行会刊・写真集「大阪下」より)

39 38 37
12 9 1 8

36
11

専門学校令による専門学校として認可される。
大阪市西区芦屋に江戸堀校舎竣工し、同年12月
移転する。
経済学科を増設する。
私立関西大学と改称する。
大阪市北区上福島に福島学舎竣工し、移転する。

第1回卒業生有志の記念写真
(卒業生数17名)

江戸堀校舎
(明治36年～明治39年)

22 20 19
9 4 11

【明治】

大阪・西区京町堀・願宗寺において、
関西法律学校を創設し、開講する。
大阪・北区河内町・興正寺へ移転する。
第一回卒業生有志の記念式典を挙げる。

興正寺の北門と角櫓
(毎日新聞大阪本社提供)

関西大学一〇〇年の歩み

△図書館と学生生活▽ 本学図書館は、千里山キャン

大学においては、学生諸君は授業に関する資料を調べたり、自分で課題を決めて勉強することになりますので、図書館を自学自習の場として活用して行かなければなりません。図書館を上手に利用するかしないかは、学生生活を活かすか否かの大きな分かれ目となるでしょう。



一般閲覧室

レファレンスカウンター

学生諸君のフロア



開架閲覧室カウンター

メインカウンター

▲充実したコレクション▽ 地下書庫には100万冊をこえる図書が収蔵されています。これらの図書は、カード目録や冊子目録を検索することによって学生諸君も利用することが出来ます。メインカウンターではその貸出、返却、予約等を受け付けています。

BOOK
新刊紹介

文学部教授 泉 澄一著
『釜山窯の
史的研究』
関西大学出版部・
11000円

江戸時代といえは私達とは通常、
府の鎮国政策を思いうかべ、日
人の海外活動など存在しなかつ
た人々がいた。それが釜山密で
ることを。本書はこの釜山密の歴史的
をめぐる近世日朝交渉史の全貌
解き明かした、最初の学術的研
究というもの。本書を讀むと、
究というものが静かな情熱と志
所産であることに、改めて思い
ふことが出来る。

平 雅行

文学部教授 藤本 是著
『科学技術時代
と哲学』
(世界思想社・一八〇〇円)

に設けていた陶窯である。製作の際には朝鮮側が陶土と陶工とを供与し、対馬藩が指揮・管理するという形態をとっており、釜山に設けられた「朝鮮館」に「明はますますその危機の様相を深めつつある。著者も指摘されているように、現象面での危険

想像とを混在させたものばかり
 作家文書に取り組むことなく、史
 料が、いずれも根本史料である
 著作がこれまわった訳ではな
 かった。山室に於いて関説は
 夢の葛藤の産物でもあった。
 流の結晶であり、また両国外交
 史の重要な産物でもあった。
 づいたときにはすでに遅く、人
 には気づかれないであろうし
 には気づかれないであろうし
 づいたときにはすでに遅く、人
 は破局に突入しているという可
 性もけしに否定できない。
 本書は科学技術の問題をたん
 々現象面においてではなくハ
 ック後期の思索において展

メモリーズ
オブズ
..
ユ一

とはいいても本学の演劇研究会「学園座」のＯＢ会は、二年に一回くらいのペースで開いているから、三十年以上も会っていないというメンバーではない。一九八六年二月に創団四十年を祝って、新阪急ホテルで

通の想い出をもちにくいものか
しさがあるし、なによりもわれ
われにとっての忘年会は、去り
行く年を忘れる会ではなくて、
お互いの歳を忘れる脱旧人類会
である。

上六のなにわ会館に集まった
メンバーは栗駒正和（大谷女子
大学）と、

ドラマ「部長刑事」で活躍中の
西山さんひとりである。

うちに、かすかすの迷優の回想
に話がついて、現役のフリー・ア
クターの道下真二さんが「東京
から帰ってきて、京橋駅前でス
タンドを開いている」と聞き「そ
れでは二次会に押しかけよう
や」という次第になった。実に
気楽なものである。旧人類たち

わの記に学園風の大作「メモリス・リンク」「青い鳥」に傾いて行つた。結成された翌一九四七年十二月二十五、六、七の三日間、毎日会館でこのミュージカル風ドラマを上演した。演出は顧問の中井睦名名誉教授、法村・友井バレエ団、吹田混声合唱団、関西児童劇団が参加して下さつた。文化不毛の時代のことがから入場を待つ観客が毎日会館を二重三重に取り巻いて、警官が整理に当たつてくれた。このように書いてみると、あの顔・この顔がまぶたによみがえつてきたわたしの「メモリス・オブ・ユー」は、いつ果てることもしない。(社会学部教授)

経済学部助教授 石田 浩蔵
『中国農村社会
経済構造の研究』
(晃洋書房・三三〇〇円)

旧中国の「農村社会経済構造」の何が変革され、何が負の遺産として現代中国に持続されているか、分限の議論を要する。きるだろう。

そのものを問うハイデッガーの思想の正当性が確認される。第二章、第三章は「人技術の本性的」の持つ両義性を明らかにするハイデッガーを介して、現代の危機があるべくしてあったということ、そしてこの事実を注視することによって救済のもの芽生えを見とらねばならないことが力説される。

もっとも「ハイデッガーの言う内閣が短命に終わったため、まず石していくが、何分にも松方正義に熱心でありすぎたよったので

毛沢東の死後、中国が近代化をスローガンにして、十年。中国は徐々にその姿を、われわれに見せてくようになつた。社会主義としては、中国の伝統と色澤が残っている。これまで日本の中国研究は、九四九年の人民中国建国後、革命の新しい側面に、目を注

関与した点については、ともな軽視される傾向が強かった。角山教授の本書は、根本の殖民事業のとり組みに注目し、その行動のあとを追つたものである。内容は、根本がメキシコに殖民を計画し、外相就任とともに、官房に移民課を設置して、領事館の開設、移住適地調査など、着実に布

この
ひめ
自ら
れる
と称
遺産
一
その
こ

らかにして頂きたいものである
(河田悌一)

◀編集後記▶



「い」であろう。しかし誰にも「い」の原子力時代の歴史的経過を制止し操縦し支配することはできない」とすれば、われわれにはいかなるでたてが残されているというのか。一人でも多く読んでいただいて、人類の未来に思いを馳せてほしい。

(渡辺幸博)

協会を設立して同志を集め、模範 者、石田浩氏は、新中国成立以前殖民を実施することとした。明治 とうりわけ一九三〇年代の中国農村三十年三月、総數三十四人の移住 社会の実態に、経済学 の角度から者が出発した。しかし、現地が移 住不適のため、折角の事業は失敗 に終わったというものである。

普通の移民史研究は、中南米各 の社会的基盤を、「中国農村慣行調 査」全六巻（岩波書店）など、主 として戦前の日本の学者の業績を 活用しながら解明している。

に受験生諸君をも想定して編 集されたものである。受験ア ドバイス 内から見た関大の 魅力。さらには、マンガによ るキャンパスライフの紹介、 関大OBによる往時のクラブ 活動、大学正門の移り変わ りを通して見た関大史など、実 に多彩な内容になっており、 在学生および受験生諸君の関

「榎本武揚と
メキシコ殖民移住」
(同文館・一八〇〇円)

榎本武揚というと、箱館戦争で
維新政権に最後まで反抗した人物
との印象が強い。歴史研究も、そ

書は、根本の行動を移民史の側面
だけではなく、経済的側面、移民
に関する政策、貿易、海運などの
事情を含めて取扱いしていること
に特徴がある。幕臣、箱館戦争、
明治政府高官と異色の経歴をもつ
根本というしたなかですぐれた人
クニカル・タームと文章を排して

いた旧中国農村の地縁・血縁結合
そして「生活共同体」となつて
その様相を、見事に提示してくれる。
全八章、三三〇ページからなる
本書は、かつての「アジアの生産
様式論争」にみられた、難解なテ
に役立ては幸いである。
せわしい年末、年始にもか
かわらず貴重な原稿をご執筆
戴いた方々に心からお礼申し
上げる。
(大西・藤井)



◀ 經集卷記 ▶

河田悌一